



Title	アラブの女性たちの声に耳を傾ける : 「反テロ戦争」のカウンター・ナラティブ
Author(s)	清末, 愛砂
Citation	国際公共政策研究. 2005, 9(2), p. 169-188
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9709
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラブの女性たちの声に耳を傾ける
— 「反テロ戦争」のカウンター・ナラティブ

Be All Ears to Voices of Arab Women:
Counter-Narratives of the "War on Terror"

清末愛砂*

Aisa KIYOSUE*

Abstract

This paper aims to expose varied human rights abuses against Palestinian women living under Israeli military occupation. Since 11th September 2001, the State of Israel has justified war crimes against Palestinians, utilizing the discourse of the "war on terror". There are counter-narratives of Palestinian women deeply related to the occupation, however, they are not paid attention outside Palestine. Why have their narratives been unknown? Because simply we have closed our ears to them. In order to know the reality of the "War on Terror", we should commence by inclining our ears to the counter-narratives of people living under the occupation.

キーワード：反テロ戦争、カウンター・ナラティブ、パレスチナの女性たち、証言者、
人権侵害

Keywords：War on Terror, Counter-Narratives, Palestinian Women, Witnesses,
Human Rights Violation

* 大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程

緒言

-OSIPP平和研究フォーラムについて-

2001年9月11日以降、地球社会は、いよいよ重大な危機に直面している。テロの原因となった地球的諸問題を顧慮することなく、米国が主導する「反テロ戦争」は、合理性も合法性も欠いたまま、人類という種を世界内戦の破局に追いやりようとしている。こうして、「戦争の惨害から将来の世代を救う」(国連憲章)という理想に反し、軍国主義・覇権主義・新自由主義・自民族文化優越主義・新人種主義といった政治・経済・社会システム総体としての「戦争と暴力の文化」(ユネスコ)が地球大に蔓延しつつある。そしてそれは、世界的な軍産学複合体の形成・拡大によって支えられている。

「平和憲法」を有する日本も、その例外ではない。新自由主義と新国家主義が相乗的に昂進するなかで、政府は、国際法と国際連合を等閑視する米国の政策に追随し、自らも軍事化の道を急いでいる。「国民」の間でも、法的あるいは思想的な「非国民」を排除しようとする不寛容の傾向が顕著になっている。日本の大学に籍を置く者としては、「共同体から発せられる義務と、知識人が〔権力と弱者の〕どちらの側につくかという問題とが悲劇的な形で問題化し、知識人を苦しめるにいたった近代国家といえ、日本をおいてほかにない」(エドワード・W・サイド『知識人とは何か』)という指摘を前に、その社会的責任の重さに肅然とせざるを得ない。

改めて言うまでもなく、平和とは、単なる戦争の不在ではなく、構造的・文化的暴力の不在を意味する。OSIPP平和研究フォーラムは、「平和」を語ることを軽侮するシニシズム・ニヒリズムに抗い、個人の尊厳に立脚した、さまざまな紛争の非暴力的な解決を志向する民主的な対話の場(公共空間)である。これまで、以下のテーマについて、自由闊達な論議が展開された。

回数	日付	テーマ	報告者
1	2003.6.9	冷戦後ドイツの平和運動と兵役拒否	Hans-Peter Richter (ドイツ平和評議会)、Frauke Kempka (ベルリン自由大学学生反戦委員会)、Robert Kliem (独日平和フォーラム)、Andreas Prusak (けま喜楽苑)
2	2003.7.10	アフガニスタンにおける女性の現状	Sahar Saba (アフガニスタン女性革命協会)
3	2004.4.29	反グローバリズムの論理と倫理-「債務帳消し」とODA	小林聡 (ジュビリー関西ネットワーク代表・日本聖公会京都聖ステパノ教会牧師・平安女学院中高チャプレン)

4	2004.5.27	アラブの女性たちの声に耳を傾ける－「反テロ戦争」のカウンター・ナラティブ	清末愛砂（大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程）
5	2004.6.21	朝鮮半島の非核化と平和構築	<small>カンジョンホン</small> 康宗憲（大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程）
6	2004.10.4	ドイツで考える「ヒロシマ・ナガサキ」－ベルリン工科大学のHiroshima-Nagasaki Peace Study Courses	Eugen Eichhorn（ベルリン工科大学教授・数学）、Jürgen Schröter、Bernd Gappa
7	2005.1.26	真に持続可能な平和と民主主義とは？－韓国『綠色評論』の挑戦	<small>キムジョンチュル</small> 金鐘哲（『綠色評論』発行人兼編集人）

話題がドイツにやや偏重しているのは、主宰者の専攻分野（ドイツ現代政治）に由来する。ただし、そこには、近隣諸国との和解の達成、地域統合過程への積極的参加、「帝国」に対する異議申し立てなど、似たような歴史過程を有する日本が学習すべき論点が多数含まれていることは確実である。

第4回OSIPP平和研究フォーラムでは、初めて本研究科の院生に報告をお願いした。報告者の清末愛砂氏は、1999年10月から2004年4月まで英国ブラッドフォード大学社会科学・人文学部に在籍して女性学の研鑽を積む一方、同大学平和学部の講義に触発され、途中計四ヵ月半（2002年3月末から4月中旬、2002年7月中旬から11月中旬）、パレスチナの非暴力抵抗運動である「国際連帯運動」に参加、イスラエルによる占領統治の実態をつぶさに見聞し、平和的手段による平和の達成というきわめて困難な実践課題に取り組んできた。フェミニズムの立場からの同氏の報告は、「反テロ」を口実に圧倒的強者の無法な先制攻撃がまかり通る現状が、展望を喪失した若者たちの自爆攻撃を誘発する「世界のパレスチナ化」に通じかねないことを参加者一同に認識させてくれた。

（木戸衛一）

1. はじめに

レジュメに沿って話す前に、私たちがなぜ大学院で研究をするのか、あるいは国際公共政策研究科という政策系の大学院で学ぶ私たちに何が求められているのか、ということから、今日の報告を始めたいと思います。私が国際公共政策研究科に入学したのは1996年です。それから8年経過しているので、長い大学院生活を送っていることになりました。私は大学院に入学以降、なぜ研究をするのかという問いにこだわり続けてきました。フランスの哲学者であるサルトル (Jean-Paul Sartre) は著書の「文学とは何か」のなかで、「何故書くか」、および「誰のために書くか」という2つの問いを言及しています。この2つの問いは、私のような大学院生、大学や研究所の研究者、あるいは在野の研究者にも問われているものだと思います。厳密な書き方をすると、私たちの場合、それらの問いは「何故研究をするのか」、および「誰のために研究をするのか」になるかと思います。サルトルは、「何故書くのか」という問いに対して、「書くとは、世界を発見[開示]することであると同時に、この開示を読者の高邁な心が果たすべき仕事として提出することである。自己を存在の全体にとって欠くべからざる[本質的な]ものとして認めてもらうために、他者の意識に訴えることである」¹⁾という言い方をしています。「他者の意識に訴える」というときには、次に「誰のために書くか」、すなわち「誰のために、他者の意識に訴えるのか」という問いがなされるのではないのでしょうか。それに対して、サルトルは「読者全体[普遍的読者]のために書く」²⁾と答えています。

サルトルの2つの問いとその答えは、私たちが研究を続ける上で、非常に大切なものだと思います。この研究フォーラムの場における私の報告は、自分が知っていることや分析したことを、この場の参加者だけと共有することを目指すものではなく、これからお話しする問題意識を参加者の皆さんに持ち帰っていただき、さらに多くの他者の意識に訴えることを目指しています。私たちは、今、非常に暴力的な出来事とともに生きています。私たちが、暴力そのものを克服していく上で、出来事は必ずや次の世代に語られなければなりません。暴力が起きているときに、それを止めることができればいいのですが、それらの出来事をどうしても止めることができないということであれば、それらが繰り返し起こらないように、最大の努力を払う必要があると思います。最大の努力というのは、暴力の原因を究明し、その歴史を伝えていく作業になるのではないのでしょうか。

今、日本には数多くの大学院が設置されており、大学院に進学する学生が増加しています。その流れのなかで、「国益」のためだけの研究が何の疑問も持たれないまま行われる、ある

1) J-P・サルトル「文学とは何か」(加藤周一、白井健三郎、海老坂武 訳)、人文書院、1998年、68頁

2) J-P・サルトル、前掲書、75頁

いは軍学協同や産学協同を思わせる研究プロジェクトが進むこともあるかと思えます。そのなかで、無意識のまま学生たちがそのような体制に組み敷かれていく可能性が多いにあります。現代的な文脈でいうと、その体制というのは、世界規模で進む「反テロ」戦争にどこかで結びつき、その体制を推進していくことを指しています。

2. 自分の足元から考えていくこと

タイトルにある「アラブの女性たち」の話をする前に、私たちの足元である「ここ」を考えてみたいと思います。私は、時々、イスラエルの占領下にあるパレスチナで起きている人権侵害について報告をさせていただくことがあります。自分たちの足元で、一体何が起きているのかということを見つめることなしに、講演のなかで、いきなりパレスチナの話をして、パレスチナと「ここ」を結ぶものが何もないということで、他者に訴える説得力に欠けるのではないかと考えています。私たちの生活とパレスチナが、どう繋がっているのかという想像力が欠如すると、パレスチナの出来事は単に「遠いところで起きている暴力」としてしか受け止められないことになります。

パレスチナの話に入る前に、沖縄の小説家である目取真俊の作品を通して、戦争の記憶、あるいは暴力の記憶というものが、現代の社会にどう結びついているかという点について考えたいと思います。目取真俊の短編小説に、「平和通りと名付けられた街を歩いて」という作品があります。この作品には、ウタとフミという女性たちが登場します。この小説は、献血運動推進全国大会に出席するために、沖縄を訪問することになった皇太子夫妻のために、現地が過剰な警備体制に置かれた状態を描いています。痴呆症にかかっているウタは、自分の汚物をあちこちのお店の商品に付けたりするので、方々から苦情が出ているおばあさんです。警察は、ウタが沖縄訪問中の皇太子夫妻の前に出てきて、汚物をつけたり、服を脱いだりするのではないかと警戒しており、彼女の孫にねちねちと張り付いたり、あるいは家に来て、ウタの息子に「何とかしてくれよ」とプレッシャーをかけます。フミは、「平和通り」と呼ばれる通りで魚の露天商をしながら、生計を立てている女性たちの一人です。ウタも昔はフミと同じように魚の露天商をしており、フミにとって、ウタは姉的な存在にあたります。警察は、フミに皇太子夫妻の通り道となる「平和通り」で、その日だけ商売をしないようにとプレッシャーをかけます。魚売りの女性たちが持っている包丁を奪って、皇太子夫妻に突っかかる人がいるかもしれないのです。彼女がその要求を呑まないと、保健所に言って、二度と露天商ができないようにするとまで脅かしました。そのような状況のなかで、その日がやってきました。いろいろ悩んだあげくウタの息子は、彼女の部屋に鍵をかけ、彼女が外出できないようにしました。しかし、彼女はその部屋からうまく抜け出し、皇太子夫妻の高

級車が「平和通り」に入ってくると飛び出して、車のドアに体当たりをするのです。警察に取り押さえられそうになっても暴れ、車の窓に自分の汚物のついた黄褐色の手形をつけました。フミは姉のように慕っているウタを押さえつけようとしている警察に体当たりをして、彼女を助けようとしていました。

この小説のポイントは、皇太子夫妻の乗った車に対して、なぜウタがそういう行動に出たのかということにあるのではないのでしょうか。彼女の行動を理解するためには、ヤマトによる沖縄の植民地化と苛酷な占領の歴史を見る必要があります。第二次世界大戦中は、沖縄の人々が日本軍によって虐殺されるという事件も起こりました。沖縄戦を生き抜いたウタは、占領と戦争という暴力の記憶を有しています。だからこそ、ヤマトの植民地主義を象徴する存在である皇太子夫妻が沖縄を訪問したときに、彼女なりの「抵抗」の表現が出てきたと解釈できるのではないのでしょうか。ウタやフミというのは小説に出てくる女性ですが、作者の目取真俊は、あとがきのなかで、ウタという名前は、母方の祖母の名前であると書いています。また、父方と母方の祖母の存在なくしては、この小説を書き上げることができなかったとも明記しています。ウタやフミのような女性たちの存在を想起することなしに、パレスチナやイラクの女性たちの話をするというのは、私としては非常に厳しいものがあります。ウタやフミの姿を想像しながら小説を読んでいるときに、彼女たちの姿が、占領地に住むパレスチナ人の女性、特に難民キャンプに住む女性たちの姿とシンクロしていくような感覚に陥りました。「ここ」と「そこ」という異なる空間に住み、何の共通点もないかのように思われるウタと難民キャンプに住むパレスチナ人の女性たちは、占領や植民地主義、あるいは帝国主義というキーワードの下で、確実に繋がっています。

次に、20世紀がどんな時代だったのか、という話をしたいと思います。在日朝鮮人の作家である徐京植は、著書「プリーモ・レーヴィへの旅」のなかで、「二十世紀は帝国主義侵略、植民地支配、なかなづく二度の世界大戦を経験した未曾有の政治暴力の時代であった。犠牲者の総数は一億七千人にもものぼるといわれる。そして現在、このような暴力の記憶そのものが暴力にさらされている」³⁾という指摘をしています。徐京植が指摘するように、20世紀というのは、実に多くの暴力が振るわれた時代、そして、多くの人命が失われた時代だったと思います。この暴力の記憶がどのように扱われてきたのかという点に関して、彼は言います。「証人たちはいま、疲れ果て、絶望して世を去りつつある」⁴⁾と。苛酷な政治暴力を経験した人たちの証言が「世界」化されることなく、あるいは証言しているにもかかわらず、聞き取られないことがないために、証言者たちが失望し、亡くなっていく時代が20世紀だったということなのだと思います。わずか数年しか経っていない21世紀は、すでにどんな時

3) 徐京植、「プリーモ・レーヴィへの旅」、朝日新聞社、1999年、203頁

4) 徐京植、「半難民の位置から：戦後責任論争と在日朝鮮人」、影書房、2002年、321頁

代になっているのでしょうか。「テロ」に対して闘う、ということであれば、戦争が正当化されるという「反テロ」言説が、2001年9月11日以降の主要な世界戦略として、顕在化しています。アフガニスタンやイラクに対する大規模攻撃が、「反テロ」言説の下で正当化されてきました。一方、イスラエルによるパレスチナ暫定自治区に対する軍事攻撃は、9.11以前から続いているものですが、イスラエルは9.11以降、自らの植民地主義の拡大を正当化するために、「反テロ」言説を見事なまでに利用するようになってきました。「イスラエルは、パレスチナ人のテロリストによって攻撃を受けている。自分たちは、テロリストから自らの身を守る権利がある」と主張するわけです。イスラエル軍のウェブ・サイトに掲載される軍事作戦の報告の多くは、「我々のテロに対する闘いは、今後も継続される」というような文言で結ばれています。実際、「反テロ」戦争下で、イスラエルがパレスチナ人に対して何を行っているかということ、家屋破壊やパレスチナ暫定自治区、特に難民キャンプに対する徹底的な軍事攻撃など数え切れないほどの人権侵害です。

私たちは、現在、「反テロ」言説に基づいた新たな帝国主義の浸透とともに進む21世紀という時代を生きています。「反テロ」戦争がこのまま正当化されていくということは、20世紀の政治暴力が、21世紀においては、さらに増加していくということになります。この点を、私たちは深刻に受け止める必要があるのではないのでしょうか。

3. タイトルから想起するもの：カウンター・ナラティブの意義

次に今日の報告のタイトルに使っている「カウンター・ナラティブ」という言葉について、論じてみたいと思います。「ナラティブ」というのは、英語で「物語」という意味を有しています。「カウンター・ナラティブ」というのは、出来事の主流なナラティブに対するカウンターとしてのナラティブ、すなわち、簡単に表現すると、さまざまな抑圧に苦しんでいる人々の物語という言い方ができると思います。2003年9月に、エドワード・サイード (Edward W. Said) というパレスチナ系アメリカ人の知識人が、白血病で亡くなりました。コロンビア大学の教授であったサイードは生前、非常に多くの事柄を言語化してきました。サイードの「ペンと剣」という本の序文を書いたイクバル・アフマド (Eqbal Ahmad) が、「彼の知的活動を支えている動機は、記憶、抑圧された側の物語、そして支配的な神話や視点が対立する視点を抜きにそのまま歴史となることを断じて許さないという決意です」⁵⁾ と言っています。主流の物語が勝手に歴史となることを止める作業として、サイードはひたすら書き続けてきた、という意味だと思います。私たちの足元でいうと、1990年代は、歴

5) イクバル・アフマド「序文」、エドワード・サイード「ペンと剣」より、クレイン、1998年、19頁

史修正主義の動きが浮上しました。国家に都合のよい歴史観を、そのまま「ナショナル・ヒストリー」＝ナラティブにしていこうとする言論活動が、積極的に展開されたわけです。サイドの作業からこの問題を捉え直すと、歴史修正主義者たちのナラティブが浸透することを許さず、カウンター・ナラティブを打ち出していく作業を、知識人が知識人の役割として行う必要があるということになるのではないのでしょうか。

エルサレムで生まれたサイドは、イスラエルが建国される前年の1947年に、家族でパレスチナを離れ、アメリカに渡りました。サイドの一族は、1948年の春までに全員がパレスチナを追い出され、それ以降は、異国での生活を強いられてきました。サイドの父親がアメリカ国籍を持っていたことから、彼も生まれたときからアメリカ国籍を有していました。そのために、彼はアメリカに渡航することが出来たわけです。1967年の第三次中東戦争の結果、東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区とガザ回廊は、イスラエルの占領下に置かれました。この出来事は、サイドが「パレスチナ人」というアイデンティティーを持つ上で、非常に大きな契機になりました。それ以降、彼は「世界」化されていないパレスチナ人のカウンター・ナラティブを語り続けてきました。彼の母語は、英語とアラビア語です。英語のネイティブということもあって、彼の活動は主には、英語圏でなされてきました。2003年にロンドンで行われた彼の追悼式に参加したとき、彼の親しい友人の一人だったタリク・アリ (Tariq Ari) が、「アメリカではパレスチナ人の声を取り上げられることが非常に少ないので、サイドの声は居住地のアメリカよりもイギリスのメディアで紹介される方が圧倒的に多かった」というような発言をしていたことが、非常に印象に残っています。日本でも、サイドは比較的知られる存在だと思うのですが、一方、パレスチナではどうかというと、それほどではありません。彼自身が担ってきた役割は、「西欧」においてパレスチナ系の知識人として物語を語るということにあったのだと思います。

次に、バーバラ・ビクター (Barbara Victor) というアメリカ人の女性ジャーナリストの著書 "Army of Roses: Inside the world of Palestinian women suicide bombers" に描かれているカウンター・ナラティブについて、紹介したいと思います。彼女は、イスラエルがパレスチナ解放機構 (PLO) を壊滅させるために、レバノンに侵攻した1982年に、ベイルートにジャーナリストとして入っていました。西ベイルートに、サブラとシャティーラという2つのパレスチナ難民キャンプがあります。1982年9月16日から18日にかけて、イスラエル軍に後押しされたファランジストと呼ばれるキリスト教右派民兵が両難民キャンプに入り込んで、次々とパレスチナ難民を虐殺するという事件が起きました。そのとき、両難民キャンプは、完全にイスラエル軍に包囲されていました。私は、両難民キャンプの虐殺事件に関する映像を、イギリスの「イギリス映画協会」 (British Film Institute) で見たことがあります。虐殺が起きているその瞬間に、キャンプの外にいたパレスチナ人の女性たち

が、イスラエル軍の兵士たちに対して、「今、家族が殺されているんだから助けて。なんとかしてよ」と訴えている映像が頭の中に残っています。その訴えを聞いても、イスラエル軍は何もしようとしません。パレスチナ解放機構を一掃するために、レバノンに侵攻したイスラエル軍が、パレスチナ人を助けるはずがないのです。バーバラは、同書の冒頭に、両難民キャンプで出会ったあるパレスチナ人の女性のことを書いています。この作品は、パレスチナ人の女性自爆攻撃者のライフ・ヒストリーを取り上げたもので、彼女はサブラ・シャティーラ両難民キャンプで取材した、あるパレスチナ人の女性のインタビューに対する答えが、女性自爆攻撃者について取材をするきっかけになったと書いています。まずそのパレスチナ人の女性について、簡単に説明をします。彼女はキャンプのなかで、すでに命がなくなった子どもを抱きかかえて座っていました。バーバラはいかにもジャーナリストらしい紋切り型の質問を彼女に始めました。バーバラの英語を聞いた彼女は、すぐにバーバラがアメリカ人のジャーナリストであることに気がつき、上手な英語で次のように答えたのです。「あんなたちアメリカ人の女性は、いつも平等というものを語ってきただろう。だとしたら、あんなたちは、我々、パレスチナ人の女性から学ぶといい。男性と平等に、多数の女性が死ぬんだよ(殺されるんだよ)」⁶⁾と。私たちは、通常、「男女平等」という言葉を肯定的に使っています。しかし、この言葉は、攻撃にさらされるパレスチナ難民キャンプでは、「女性たちは男性と同じ数だけ、分け隔てなく殺される」というカウンター・ナラティブにも成りうるのです。パレスチナ人は、今でもサブラ・シャティーラと聞くと、虐殺のことを思い浮かべます。1982年から20年以上経過していますが、暴力の記憶として持ち続けているのです。

岩波書店から発刊されている「岩波フォト・ドキュメンタリーー世界の戦場から」という写真集のシリーズの第1巻にはジャーナリストの広河隆一の「反テロ戦争の犠牲者たち」、第2巻にはフォト・ジャーナリストの豊田直巳の「イラク爆撃と占領の日々」が収められています。これらの写真集の書評論文を書いたときに、サブラ・シャティーラ両難民キャンプで、一族の多くを失った女性のことを以下のように紹介しました。「サブラ・シャティーラ両難民キャンプでの虐殺事件のことを聞いたたびに、私はある女性を思い出す。2002年7月から11月まで滞在したヨルダン川西岸地区の北部に位置するナブルス郊外のバラータ難民キャンプで、私の生活を世話してくれたティティ家の母である。(略) 彼女の18歳の末息子ジハード・ティティは、2002年5月27日にテルアビブの郊外にあるアイスクリーム屋さんで自爆攻撃を行った。(略)

2002年8月の後半にティティ家の母と娘たち2人でお茶を飲みながら話をしていたときに、母が結婚前にレバノンに住んでいたということを偶然友人から聞いていた私は、『ママ、

6) Victor, B., *Army of Roses: Inside the world of Palestinian women suicide bombers*, London, Robinson, 2004, p.2, 日本語訳は本稿の著者による。

レバノンに住んでいたことがあるって聞いたけれど、どこに住んでいたの？サブラとシャティーラのキャンプ？』と無神経にも聞いてしまった。そのとき彼女の顔は一瞬にして曇り、そばにいた娘たちが『母はサブラとシャティーラのキャンプにいたのよ。1982年に虐殺が起きたとき親戚37名は皆、虐殺されたの。母は結婚して、幸運にもバラータ難民キャンプに住んでいたから助かったのよ』と教えてくれた。広河が両キャンプに入ったときに目にしたパレスチナ人の中に、彼女の親戚が含まれていたかもしれない。

まずいことを聞いてしまったと後悔していた私に、娘の1人がさらに続けた。『私たち家族はイスラエルに土地や家を奪われ、難民となって、いとこが暗殺され、弟が自爆攻撃し、そして今、この家屋が破壊されるかもしれない。イスラエルは十分なことをしたじゃない。これ以上、何を望むのよ』と。あまりにも十分すぎるほど十分だ。一体これ以上何をしたいのか。ティティ家の母親は支配と占領の歴史とともに生きてきた。そして今、『反テロ戦争』が展開される中で、ティティ家の母、娘たち、そして息子たちは日々、家を爆破するためにイスラエル軍が襲撃するのではないかという恐怖の中で生きている。ティティ家の母の身の上で起きた、あるいは起きている出来事は、『反テロ戦争の犠牲者たち』の一物語として語られなければならないカウンター・ナラティブである』⁷⁾と。

4. パレスチナの女性たちのカウンター・ナラティブ

パレスチナ人の女性たちというと、日本で暮らす私たちにはなかなかイメージがわきにくいかもかもしれませんが、アメリカやイギリスでパレスチナ人の女性たちというと、「自爆攻撃などのテロ行為を促進する母親たち」、あるいは、「自爆攻撃者を持つ母親や姉妹たち」という表象されることがあります。「テロリスト」を創出する側の女性たちというイメージが持たれているということですね。それから、アメリカやヨーロッパで、「パレスチナ人の母親たち」というときに、「自分の子どもたちが、イスラエル軍に投石することを望んでいる」、あるいは「投石に出かけた子どもたちが、殺されることを何とも思っていない」と描かれることがあります。ヨルダン川西岸地区のラマッラーに事務所を持っていたパレスチナの女性団体の連合体である「女性問題専門委員会」(Women's Affairs Technical Committee)を訪ねたときに、「スウェーデンのシルビア女王と福祉に関心を寄せるすべての人々への公開書簡『パレスチナの子どもたちの保護を求めるアピール』」⁸⁾をもらいました。このアピールは、2000年10月29日に、「ヨルダン川西岸地区とガザに住むパレスチナ人の母親たち」という名

7) 清末愛砂「抵抗のカウンター・ナラティブ」、アソシエ、No.12、御茶の水書房、2004年、196-197頁

8) 原文のタイトルは、「An Open Letter to Queen Silvia, Queen of Sweden And to All Those Concerned with the Welfare of Children: An Appeal for the Protection of Palestinian Children」(Women's Affairs Technical Committee)。日本語訳は本稿の著者による。

前出されたものです。このアピールから、彼女たちの叫びがひしひしと伝わってきます。このなかには、「私たちはあなたたちが世界中の子どもたちの福祉に関心を寄せていることに感謝の気持ちを示したいと思います。ゆえに、私たちは、イスラエルの占領に対する闘いと独立国家樹立のための闘いのために、パレスチナ人が子どもを『利用』している、とあなたたちが糾弾しているというメディアの報道を聞いたときに、非常に心をかき乱されたと同時に、衝撃を受けました。(略) 私たちは他の人と同様に、パレスチナ人が子どもたちとともに、威厳と安全と平和に満ちた生活を送る資格があると信じています⁹⁾」と書かれています。私は、同連合の当時のディレクターだったスヘル・アズーニ・マーシ (Suheir Azzouni Mahshi) さんにインタビューをしたことがあります。彼女は、その途中に泣き始めました。そして『「パレスチナ人の母親は子どもが殺されても何とも思わない冷血な女だ』とよく言われるけれど、イスラエル軍が撃つと分かっているのに、誰が自分の子どもを投石に行かせたいと思うんだ』と嘆き始めました。その彼女の涙を見たときに、「パレスチナ人の女性たち」に対する偏見を助長するような言説に気をつけなければならないし、また、自分自身が「パレスチナの女性たち」のことを語るときには、このような言説には乗らず、丁寧に「語る」ことが必要なのではないかと思いました。「パレスチナ人の女性たち」と言っても、一口で表現できるものではありません。当たり前ですが、さまざまな人がいます。レジメのなかには、「自爆攻撃者を含むフリーダム・ファイター、政治犯の夫の釈放を待つ妻、拘束されている息子を案じる母、故郷への帰還を待ち望む難民たち、子どもたちの帰宅を待つ母、子どもたちに食べさせる食事のことで頭を悩ませる母、ラジオやテレビ局のジャーナリスト、政治家、詩人、教員、農民・・・など」と書きました。階級も違えば、職業も違います。日々の悩みも違います。しかし、占領地に住む女性たちが共有している経験が一つあります。それは、占領下にある生活という出来事です。占領地に住むパレスチナ人は誰でも、占領に影響される生活を送っています。例えば、ラジオやテレビ局で働いている女性たちが職場に行こうとしても、イスラエル軍の検問所があるために、家を出たとしても、職場に行けるかどうか分かりません。「登下校中に、イスラエル軍の攻撃で子どもが殺されてしまうかもしれない」と不安に思っている親たちも数多くいます。あるいは、「息子がイスラエル軍の軍事作戦のなかで逮捕された。長く拘束されるかもしれない」と心配する親たちも数多くいます。イスラエルは裁判をすることなしに、人を長期間拘束することができる行政拘束という制度を有しています。この制度は、主にはパレスチナ人に対して使われており、イスラエルの刑務所には、パレスチナ人の政治犯が多数収容されています。「もしかしたら息子たちは拷問を受けているかもしれない」、あるいは「私の夫は政治犯としてずっと拘束

9) *Ibid.* 日本語訳は本稿の著者による

されているけれども、もしかしたら、ひどい拷問に遭っているかもしれない。一体、いつになったら釈放されるのだろうか」と心配する親や妻たちがいます。また、政治犯の妻のなかには、「夫が逮捕されているために、生活の糧を稼ぐ人がいない。どうやって子どもたちを食べさせることができるのだろうか」と頭を悩ませている人たちも数多くいます。

パレスチナ人は、ただ単に、抑圧され続けているわけではありません。占領下を生きるための機知に富んでいます。それは、占領で培われた生活の知恵です。パレスチナの女性学センター (Women's Studies Center) のウェブ・サイトに掲載された、サマ・アウェイダ・レフタウィ (Sama Aweidah Leftawi) という女性による興味深いエッセイ "My Sister, Palestinian Working Woman" を、ここで少し紹介したいと思います。彼女は、「なぜならあなたは他のすべての女性とは違うから、あなたは特別だから、あなたは危険人物だから、あなたは世界の安全保障に対して危険だから、あなたは世界の平和を脅かし、『石』として知られ、認識されている破壊兵器を発明してきた犯罪的な破壊者たちの母や姉妹だから、朝、職場に向かうときは、上記に挙げた理由から、以下の指示に従うべきです¹⁰⁾と書いて、そのあとに、どうするべきかということを示しています。例えば、職場に行くときは、通常よりも2時間早く起きて家を出たほうがいいというアドバイスがあります。なぜなら、途中でイスラエル軍の検問所があるかみしれず、何時間待たされるか分からないからです。もしかしたら、その日は通過が許されずに、職場に行けなくなるかみしれません。また、並んでいるときに、イスラエル軍に催涙弾を投げられるかみしれないので、ガーゼと香水を携帯しようという指示も出しています。なぜガーゼと香水かというと、催涙弾を投げられたときに、ガーゼに香水をつけて鼻に付けると、少し苦しみが緩和されるからです。私自身も何度か催涙弾を投げられたことあり、パレスチナ人の女性が香水をつけたハンカチを鼻のところに持ってきてくれて、少し楽になったという経験があります。検問所を避けるために、裏道のある丘を越える必要があるかみしれず、靴が汚れるから、職場に着いたときに靴をきれいに拭うことができるように、タオルを持っていきなさいというアドバイスもしています。占領下の生活を生き残るための知恵ですが、これらの知恵からも分かるように、パレスチナ人の女性たちは、私たちが阪急電車に乗って梅田に行くというのとは、訳が違う生活を強いられているということなのです。

学校に行こうとしている少女たち、あるいは専門学校や大学に通う女性たちに対しても、イスラエル軍は検問所で人権侵害を行っています。私がナブルスに住んでいたときに、目の前で起きていた出来事を紹介します。ある朝、検問所のイスラエル軍の態度が強硬で、実弾を撃ち始めたので、女子高生を含む子どもたちは検問所を通ることができませんでした。仕

10) Leftawi, S.A., *My sister, the Palestinian Working Woman*, Women's Studies Center, <http://www.wameed.org/stories/mysister.html> (2005年3月4日)、日本語訳は本稿の著者による

方がないので、子どもたちはイスラエル兵がいない裏道を通って学校に行くことにしました。検問所を通れば、おそらく10分で到着する距離なのですが、丘を越えるので、1時間かける必要があります。パレスチナの子どもたちは幼い頃から、検問所を通れば、他にどういう手段があるということを生活のなかで学んでいます。裏道にイスラエル兵が待っているということもあるので、必ずしも学校に行き着くわけではありません。また、登校後に学校が銃撃を受け、授業が中止になることもあります。

占領下のパレスチナ人の生活を丁寧に見ていくと、イスラエルの植民地主義と結びついたパレスチナ社会の階級問題も見えてきます。例えば、難民キャンプの住民と難民ではあるけれど、難民キャンプの外に家を建てることができた人、あるいは最初から難民ではないというパレスチナ人との間には、歴然たる差があります。この差は、外からだ見えにくいこともあります。パレスチナ人は来客があると、コーヒーやお茶やビスケットなどを出して歓待するし、プライドもあって、貧しさが見えないようにする努力をします。しかし、交流が深まって内部が見えるようになってくると、難民キャンプの住民たちが、キャンプの外で暮らす人たちと比べると、貧困線以下の生活を強いられて割合が高いということが分かってきます。検問所の封鎖や外出禁止令の発令によって、イスラエルの軍事占領下にあるパレスチナ暫定自治区の経済は破綻状態にあるので、占領地に住む多くのパレスチナ人が貧困にあえいでいます。女性たちのカウンター・ナラティブを紹介する前に、どういう経緯でパレスチナ難民が生まれたのか、という話を簡単にします。1948年に「ユダヤ人国家」イスラエルが建国されました。その建国によって、非ユダヤ人は排除の対象となり、多くのパレスチナ人が故郷を追われ、難民となりました。彼・彼女たちはいまだに難民のままです。パレスチナ難民は皆、ディアスポラの記憶を共有しています。一世だけでなく、難民として生まれた二世や三世の子どもたちが、それらの記憶を継承しているのです。難民のなかには、故郷の家の鍵をいまだに持っている人たちがいます。なぜ、鍵を持っているのか、というと、いつか故郷に帰ったときに鍵がないと家に入ることができないからなのです。BBCのドキュメンタリー・フィルムの中に、前述のサイドがパレスチナを旅したときの様子をまとめた作品「パレスチナを探して」(In Search of Palestine 1998年制作)があります。彼がベツレヘム近郊にあるデフィーシャ難民キャンプを訪ねたときの様子が、そのなかのワン・シーンとして出てきます。高齢の男性が、自分の故郷の鍵を彼に見せます。それを見たサイドは、悲しみと悔しさが混じった表情を見せます。鍵の保存は故郷に帰る難民の意思である、と彼は感じ取ったのではないのでしょうか。私が住んでいたナブルス近郊にあるバラータ難民キャンプのティティ家の壁には、大きな木製の鍵の模型が掛かっています。手先が器用だった息子のジハードは、自爆攻撃で命を絶つ前に、木を使っていろいろなものを作っていました。そのなかの一つに、鍵の模型があったわけです。故郷のハイファにいつの日か戻ること

を夢見ながら、模型を作ったのかもしれない。

パレスチナのインティファダ（民衆一斉蜂起）において、女性たちがどのような役割を果たしてきたのかという話も先にしておきたいと思います。1987年に第一次インティファダが始まりました。子どもたちが占領者であるイスラエル軍に石を投げて抵抗するということから「石の革命」とも呼ばれています。第一次インティファダは、地下指導部である民族統一司令部の下で非常に組織化された占領地の全住民による抵抗運動でした。占領者のイスラエルに対して、不服従を示したのです。ストライキ、イスラエル商品のボイコット、警察・税務職員の辞職、税金の不払い運動、イスラエル当局に学校が閉鎖されたときに、民間の家を教室にして子どもたちに教育を行うといった活動を展開していました。女性たちは、第一次インティファダに積極的に関わっていました。組織された人民委員会のなかには、女性委員会もありました。税金不払い運動は、特に Beit-Safur というベツレヘムの近くの街で、盛り上がりを見せました。税金不払い運動を展開した Beit-Safur の女性の一人が、そのときの様子を描写した文章を読んだことがあります。第一次インティファダは、圧倒的に非暴力による抵抗運動だったわけですが、これに対して、2000年9月に開始された第二次インティファダにおいては、抵抗手段として武装化・軍事化が加速しました。女性たちは、第一次インティファダのときに比べると後方に押しやられ、武装闘争の前線では武装した若い男性が闘っています。しかし、自爆攻撃に関しては、少し変化が見られます。元来、自爆攻撃は男性によって行われていたのですが、最近では少数ですが、自爆攻撃をする女性が出てきました。女性の自爆攻撃者と男性の自爆攻撃者との間にある明らかに異なる点は、女性に対しては、パレスチナ社会の女性に対するジェンダー・バイアスを利用して、自爆攻撃へのリクルートがなされる場合があるということだと思います。離婚歴を持つ女性や「ふしだら」な烙印を押された女性に対して、リクルーターが「自爆攻撃をすることによって、社会における名誉回復がなされる」とけしかける場合があるわけです。もちろん、全てのケースがそういうわけではなく、婚約者をイスラエル軍に殺害された女性による自爆攻撃の例もあります。動機はさまざまとはいえ、このような社会規範を利用することによって、女性を武装化・軍事化の究極的な形として行われている自爆攻撃に組み入れるというのは非常に問題があります。一方、女性たちが、占領に抗するデモを自ら組織しているということも、伝えなければならないと思います。例えば、イスラエルは現在、ヨルダン川西岸地区に、パレスチナ人が「アパルトヘイト壁」と呼ぶ壁を建設しています。イスラエルは、それを「防御フェンス」と呼ぶことによって、「パレスチナ人のテロリストから、自分たちを守るため」と主張していますが、現実には、パレスチナ人をゲットーのなかに囲い込むために作っている壁です。壁の建設は、その周辺に住む農民たちの土地を奪っています。土地がなくなると、農民たちは生活の糧を失い、またたく間に生活が破壊されることになるのです。農民

たちはもちろん、黙って見ているわけにはいかないので、村を揚げて抗議行動を続けています。そのなかで、女性たちが女性たちだけの抗議デモを組織することがあるわけです。彼女たちはデモのなかで、「壁は平和への道には繋がらない。私たちは子どもたちを養う権利を拒否されている。私たちはテロリストではない。自由を切望する人々なのです」というような主張を掲げています。

配布レジュメに、心臓発作をおこした夫が病院に向かう途中にイスラエル軍の検問所で止められ、搬送が遅れ命を落とすことになったために、「あんたたちのせいで、私の夫は昨日、心臓発作で死んだんだ。自爆攻撃が続くだろうよ」と叫ぶ女性と、壁の建設によって生活の糧であるオリーブの木を奪われたために、「このオリーブの木は私の息子よりも年をとっているんだよ。オリーブの木がないと子どもたちを養うことができない。ここは私たちの土地なんだ」と主張する女性のことを紹介しています。私は2004年4月16日に、留学先のイギリスのブラッドフォードから日本に戻ってきました。その10日ぐらい前に、オサマ・クアシュー (Osama Qashoo) というパレスチナ人の映画監督が制作した作品「My Dear Olive Tree」(親愛なるオリーブの木)を観ました。その映像の中に、上記の2人の女性が出てきます。オサマは、壁の建設によって、土地が接収されて、パレスチナ人の農民にとって命よりも大切なオリーブの木が根こそぎ取られていくことに対する抗議の表現として、この作品を制作したのだと思います。パレスチナ人の生活は、オリーブと深く結びついています。オリーブなしには生活ができないと言ってもいいほどです。この映像の最後に、監督自身が言います。「オリーブは、平和の象徴ではなく、抵抗の象徴だ」と。オリーブの木が奪われると生活ができなくなるので、日常の生活権を求めて闘うという意味でそう言ったのだと思います。

レジュメに、「ラファで瓦礫になった家の跡に這いつくばり、消耗しきった様子で何かを探しているおばあさんの様子をラファのムハンマドさんが書いています。何を探しているのかと尋ねたところ、『未来を、未来を』と答えた。この老女が探していたのは、1948年のナクバの時に失った家の鍵でした¹¹⁾』という文章を紹介しています。ラファというのはガザ南部にある街で、イスラエル軍に最も激しい攻撃を受けている街の一つです。パレスチナ人は、1948年に多くのパレスチナ人が難民化したということを指して、「ナクバ(大災厄)」と呼んでいます。2004年5月に、ラファに侵攻したイスラエル軍は、わずか3日間で1000人以上のパレスチナ人が家を失うような大規模の軍事作戦を行いました。この軍事作戦の下では、パレスチナ人が家のなかにいるにもかかわらず、軍用ブルドーザーで破壊し始めるというような人権侵害が平然と行われました。5月19日には、あまりにもひどい家屋破壊と軍事侵攻に対して、3000人のラファ在住のパレスチナ人が抗議のデモをしたのですが、デモ隊に

11) ナブルス通信2004年5月15日号、<http://www.onweb.to/palestine/siryo/rafanakba15may04.html> (2005年3月4日)

対してイスラエル軍は3発のミサイルを撃ち込んだのです。デモ隊にミサイルを発射して弾圧するというような暴挙は、いまだかつて聞いたことがありません。イスラエル軍のラファ侵攻に対して私がとても失望したのは、これだけの家屋破壊や攻撃が起きているにもかかわらず、日本のマス・メディアが、大きく報道しなかったということです。パレスチナ人にとって「大事件」であっても、国際社会においては「世界」化されるに値しない「小さな」出来事なのです。それは、パレスチナ人の身の上で起きていることだからです。

続けて、ナブルスの近郊にあるイスラエルの入植地に単身攻撃をして殺された息子を持つ、バラータ難民キャンプのアイシャのことを紹介します。彼女は、亡くなった次男の写真をお財布のなかに入れていて、私が家に遊びに行ったときに、溜息とともに「うちの息子は美しいでしょ、美しいでしょ」と繰り返しながら、彼の写真を見せてくれたことがあります。そのときの彼女は完全に、泣き顔でした。その日の彼女は、数時間後にイスラエル軍が家を爆破するためにやってくるのではないかと不安に思っている様子を、隠し切れないようにも見えました。以前から、イスラエル軍が「息子(長男か三男のこと)を明日までに、イスラエル軍に出頭させなかったら、家を壊す」というような内容の脅迫電話をかけてきていました。普段は泣き言を言うような女性ではありません。パパ抜きを一人勝ちして、「アハハ」と笑っているようなときもあります。そんな彼女は息子の話になると、泣き出しそうな顔になるのです。2003年2月27日に、イスラエルに対する攻撃者を輩出した家族ということで、彼女の家はイスラエル軍によってダイナマイトで吹き飛ばされました。今、彼女は、イスラエルの刑務所に政治犯として収監されている長男と三男の安否を気遣いながら、彼らが釈放される日を再建した家で待っているのです。

次に、イスラエル兵に射殺された15歳の少年バハの母親の話を紹介します。バハは、ナブルスで外国人の平和活動家と一緒に歩いていたときに、後ろから装甲車で近づいてきたイスラエル兵に射殺されました。イスラエル軍のスポークスパーソンは、この事件に対して、「ナブルスの少年が、イスラエル軍に対して火炎瓶を投げようとしたので射殺した」と発表をしました。その発表を鵜呑みにしたロイター通信は、そのまま記事にしました。なぜ、この少年が殺されたのかというと、彼はナブルスを徘徊するイスラエル軍のジープや戦車に向かって、頻りに投石していた子どもの一人なので、兵士に顔を覚えられていたからだと思うのです。兵士がバハを殺害するときに用いた実弾は、ダムダム弾でした。ダムダム弾の使用と聞くと、私たちは国際法違反と思うかもしれませんが、しかし、占領地では、パレスチナ人を殺傷するのに平然と使われています。国際法が全く通用しないのが、イスラエルの占領下にあるパレスチナなわけです。私たち外国人の平和活動家がバハの家を訪ねたとき、彼の母親は号泣しながら尋ねました。「息子は本当に火炎瓶を投げたの?」と。私たちが、「息子さんは、火炎瓶を投げてもないし、持ってもいなかった」と答えると、彼女は「じゃあ、な

ぜ、殺されたの？」と聞いてきました。彼女の問いに、何と答えることが出来たのでしょうか。答えは、「彼がパレスチナ人であったから」というそれだけなのです。しかし、そう答えるのはあまりにも酷なことでした。数日後に道端で偶然、バハの父親に会いました。彼は、シャヒード¹²⁾となった息子のポスターを持っていました。そして、無理やり笑顔を作りながら、私に「うちの子はいい子だったろ？」って話しかけてきました。目には、明らかに涙が浮かんでいるのが分かりました。パレスチナ暫定自治区の街には、シャヒードとなったパレスチナ人のポスターがたくさん貼られています。毎日、新しいポスターが作られます。貼るところがなくなってしまうのではないかと思うくらいに、パレスチナ人は日常的に殺されているのです。

息子の自爆攻撃を聞いた後に、「息子は帰ってくる。仕事に行くと言ったのだから。自爆攻撃をすると知っていたら、部屋に鍵をかけて、家から外に出さなかった」と泣き叫んだ女性の話をして。彼女は、2002年7月に自爆攻撃をしたイブラヒム・ナジの母親です。自爆攻撃の当日、イブラヒムは、「これから仕事をしに行く」と言って外出しました。彼の祖母がテレビを見ているときに、イブラヒムによる自爆攻撃のニュースが流れたそうです。驚愕した彼女は、母親のエンサフのところに行き、そのニュースを伝えました。その後、エンサフは、「私の息子は人殺しではない。仕事に行くと言ったのだから、帰ってくる」と泣き叫んだかと思うと、ふと我に返って、「息子はパレスチナのために、いいことをしたのよ」と言いながら自分を慰めるといったことを繰り返していたと聞きました。私は、彼女の状態が落ち着いてから、家に遊びに行くようになりました。彼女の家に行くと、砂糖が入っていないアラビア・コーヒーを出してくれます。パレスチナではシャヒードが出た直後の家に行くと、通常は砂糖が入っていないコーヒーが出されます。イブラヒムが亡くなってから3ヵ月以上経過しても、エンサフの家のコーヒーは砂糖抜きのものでした。コーヒーの苦さが、家族の悲しみの深さを物語っているかのように思えました。

レジュメには、「異国の地で、パレスチナのオリーブの木が倒される映像を観て、涙を流す女性」と書いてあります。前述の映画監督オサマの作品をブラッドフォードで観ていたときに、会場から誰かのすすり泣く声が聞こえてきました。映画が終わった後に、一体誰が泣いていたのだらうと思ひながら、狭い会場を見渡したときに、ヒジャブを被った女性に気がつきました。彼女は、ジェニン出身の夫と子どもたちとともに、ブラッドフォードに住んでいるエルサレム出身の女性でした。映像を通して、パレスチナの地が収奪され、オリーブの木が倒されていく映像を目にしたときに、困難な状態にある故郷を思って涙が出てきたのだと思います。

12) アラビア語の「シャヒード」の訳語として、何かの大義のために身を犠牲にした者という意味から、日本語では「殉教者」と表記することが多いが、語源的には「誠実な証人」という意味である。

泣き出しそうになりながら、「オリーブを摘んでいたら、入植者たちが襲ってきた」と訴えていたおばあさんの話も紹介したいと思います。パレスチナ滞在時に、パレスチナの農民と一緒にオリーブを摘む作業をしたことがあります。入植地に近いオリーブ畑で収穫作業をするというのは、農民たちにとって非常に危険な仕事です。イスラエルの入植者たちに襲撃されたり、あるいは自分の土地で収穫しているにもかかわらず、イスラエル軍に逮捕されたりということが日常的に起きるからです。10月から11月にかけてのオリーブの収穫時には、外国人やイスラエル人の平和活動家が、オリーブの収穫をお手伝いするキャンペーンが行われます。このキャンペーンでは、労働力が期待されているわけではなく、外国人やイスラエル人の存在を示すことで、入植者やイスラエル軍の襲撃を抑える効果を狙っています。おばあさんと彼女の娘と一緒にオリーブを収穫しているときに、彼女が「ご飯を食べなさい」と言いながら、パンやトマトを出してくれました。そのときに、彼女は急に頭を殴られるジェスチャーをして、「外国人がいなかったら、入植者が再びやってきて、私のことを殴ったかもしれない。そうしたら、オリーブを収穫できない」と泣き出しそうになりながら訴え始めました。それを聞いていた私は、「夕方までいるから、一緒に収穫しましょう」と答えるしかありませんでした。占領地では、農民たちが安全に農業を営む権利すら奪われているのです。

最後に、パレスチナ人の移動の自由を大幅に制限しているイスラエル軍の検問所で、出産せざるを得ないパレスチナ人の女性たちのカウンター・ナラティブを紹介します。検問所では瀕死の病人であっても、産気づいた妊婦であっても、簡単に通過できるわけではありません。救急車が長時間待たされるということは日常的な光景です。その結果、検問所で出産せざるを得なくなったケースが、いくつも報告されています。なかには、病院に到着するのが遅すぎて、死産したというケースもあるのです。2003年12月に、双子を失った女性の話が、パレスチナ関係の情報メーリングリストに流れました。彼女はナブルス近郊の村に住む20代の女性でした。産気づいたときに夫と一緒に病院に行こうとしたのですが、検問所で長時間待たされた結果、彼女はたどりついた病院で死産しました。新生児の誕生を待望していた彼女と夫は検問所の存在によって、その夢を見事に打ち砕かれたのです。

5. おわりに：カウンター・ナラティブに耳を傾けること

私たちのまわりには、多くの語られていないカウンター・ナラティブがあります。しかし、私たちはその存在に耳を傾けるどころか、それらのナラティブに対して疑いの眼差しを向け、あたかもなかったかのごとく、否定しようとすることもあります。前述の徐京植は、「プリーモ・レーヴィへの旅」の中で、次のように言っています。「証人がいないのではない。証言

がないのではない。『こちら側』の人々が、それを拒絶しているだけだ。グロテスクなのは『こちら側』である¹³⁾と。現在では、さまざまな出来事のカウンター・ナラティブは、インターネット経由で世界中に発信されることもあります。抑圧されている人々の声は、流れているのです。今日、パレスチナ人の女性のエッセイを紹介できたのも、パレスチナの女性学センターのウェブ・サイトにアクセスしたときに、目にしたからでした。私たちは、出来事の主流なナラティブに対して、必ずやカウンター・ナラティブが存在しているということを想像することがあるでしょうか。イスラエルの軍事占領下に住むパレスチナ人の女性たちが、どんな状況に置かれているのかということ想起することがあるでしょうか。あるいは、彼女たちの生活が、私たちとどう連関しているのかということを考えてみる必要があるでしょうか。カウンター・ナラティブの拒絶は、証言者たちが持ち続けている暴力の記憶を、暗殺・抹殺する行為だと思えます。こうした状況が続けば続くほど、私たち人間は徐京植が指摘するように、逆ユートピアの世界に陥り、暴力を加速させていくことになります。

私が、なぜ、占領下に生きるパレスチナ人の女性たちのカウンター・ナラティブにこだわるのかということ、そこには個人的な理由があります。私は過去10年間、身勝手にも次のように思い込んでいました。「今は、苛酷な占領下にあるかもしれないけれど、いつの日か占領下の生活が終わり、彼女・彼らたちが占領の経験を語ることができる時代が来るだろう」と。これは明らかに間違った認識でした。パレスチナの状況は10年前よりも、はるかに悪化しているのです。占領地に住むパレスチナ人は、死と隣り合わせの生活を、日々、強要されています。プリーモ・レーヴィ (Primo Levi) は、アウシュビッツを生き延びて、故郷であるイタリアのトリノに戻った後に、アウシュビッツの経験を作品化しました。徐京植の「プリーモ・レーヴィへの旅」を再び参考にしながら、逆ユートピアを生き延びた人間が証言者として、人々に希望を与えるのかどうかという点と私たちが今、どんな時代に生きているのかという点を再考したいと思います。確かに、あの逆ユートピアを生き延びたプリーモ・レーヴィが人間界に戻り、著作を通して暴力の証言をすることができたというのは、私たちに希望を与えます。しかし、現実はその単純なことではありませんでした。プリーモ・レーヴィは1980年代の後半に、自殺を図ります。なぜ、逆ユートピアの証言をしてきた彼が、自殺を図らなければならなかったのでしょうか。それは、今、ここにいる私たち一人ひとりが考えなければならない問いだと思います。私たちは、今、どのような世界に生きているのでしょうか。プリーモ・レーヴィのような暴力の証言者が失望し、自ら命を絶たなければならないような世界に、私たちは生きているのではないのでしょうか。そのことを認識し、暴力を生き延びた証言者たちのカウンター・ナラティブを確実に聞き取って応答することが、私

13) 前掲「プリーモ・レーヴィへの旅」、204頁

たちに課せられています。最後に、昨年亡くなったナブルス出身の女性詩人ファドワ・トゥカーン (Fadwa Tuqan) の詩「その胸に抱かれていれば」を紹介したいと思います。1967年以降、彼女は占領地 (=東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区とガザ回廊) に思いを込めて詩を書いてきました。これらの詩は、彼女の占領に対する抵抗の表現であるとともに、彼女のカウンター・ナラティブそのものです。

「その胸に抱かれていれば」¹⁴⁾

この土地で死に

ここに葬られれば 何もいない

そしてこの土の下に 私はとけて消えていく

それからこの土地に草をおくり

花をおくり

このくにが育てた子どもの手で摘みとられる

このくにの胸に抱かれて 土になればら 何もいない

草になればら 花になればら 何もいない

14) ファドワ・トゥカーン、「『私の旅』パレスチナの歴史：女性詩人ファドワ・トゥカーン自伝」(武田朝子 訳)、新評論、1996年、4頁